
フィニクス ～永遠の青～

多雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィニクス 〜永遠の青〜

【Nコード】

N 6 1 3 4 X

【作者名】

多雨

【あらすじ】

高校二年目の夏休み

刻三清一はオカルト部部长 吉良崎歌子に呼ばれ

とある田舎の神社に向かった

しかしそれは恐怖の始まりであり、光の出会いでもあった

序章 出会いの手前（前書き）

この小説はフィクションです

序章 出会いの手前

暑さがピークを迎える八月の始めごろ、

高校二年生刻三きさみせいち清一は学校の部活の部長に呼び出された

集合場所は町から4キロの小さい田舎の神社

友達が少ない刻三とって携帯にメールが届くのはうれしいものだったが

真夏の中、自転車で4キロの坂道付きの道のりを越え、田舎にこいと今回のメールは生まれて初めてため息がでるメールだった

坂付き4キロ、涼しい部屋の中でもこの言葉を見ると汗が出る

「……めんどくさい……うん……」

しかし部長の命令だ仕方がない……っか」

刻三は学校指定のサイドバックの中に携帯やお菓子など入れ玄関に置いてある折りたたみ式の自転車を外に出した

「はぁ……部長のことだ何かの事件に首を突っ込むか？

それとも珍獣の噂でも聞いたのか？」

ぶつぶつと小言を言いながら玄関の扉を開けると

真夏の熱風が刻三の体に当たった

「だるい」

まるでクーラーの効いたスーパーからの真夏の帰り道

「しかしたまには運動するのも悪くない

……頑張るか」

自分のほっぺを叩き気合を入れなおした刻三は

自転車にまたがりカバンをかごに入れ

集合するように言われた神社に向かった

数時間後

「おっそーい 待ちくたびれたわ！」

「呼び出されてすぐ来たんだ 感謝してほしいな」

ショートヘアのワンピースの部長、吉良崎歌子きりさきうたこは

神社の大きな木下で部員が来るのをまっていたようだし
しかしあたりを見回しても人っ子一人見当たらなかった

「部長あとのみんなは？」

「まだよ、まったく！」

吉良崎はかんかんにながら近くのベンチに座った

「オカルト部を何だと思ってるのよ！」

「神秘的現象を調べる部活では？」

「まあそれもあるわ！ なんせその現象を調べにきたのよ」
ちりやりんちりん

遠くから自転車のベルの音がした

刻三と吉良崎は音の方角を見た

そこにはヘルメットをつけた男性が

田んぼの間の道を手を振りながら、二人のほうへ向かってきた

吉良崎は座っていたベンチに立ち大声で叫んだ

「おっそいわよ！！」

男性は近くの日陰に置いてある刻三の自転車の隣に

自分の自転車を置いた

「いやいやースマンスマン、ちょっと事故りそうになって」

「言い訳はいらないわ！ 何分まったと思ってるのよ！」

「あはは、ヒーローは遅れてくるもんなのだ！」

「誰もあんたをヒーローと思ってるわ、しかもヘルメットまだつけてるし」

置いてきなさいよ！ 暑苦しい」

「おつとスマン」

この無邪気な男は北村西都きたむらやさいと

刻三と同じクラスで成績は中の下、刻三とは中学時代から親友
最近髪を切ったらしい

「いやいや！ それでも部長さん今日はノースリーブですか」

北村は部長の服装をジロジロとしたからなめる様に見た
「ちよっ！なに見てんのよ！」

「うむうゝなんともだいたんな・・・」

吉良崎の右ストレートが北村の顔面を直撃した

「ぐほおっ」

北村は空中へ吹っ飛び大回転しながら地面へ落ちた

「へ・・・変体！」

「・・・・・・」

刻三は目をちよつと苦笑いしながら

部長へ今日内容を質問をした

「ぶ・・・部長、今日の内容は？」

「全員きたら言うわ、稲井《いない》がまだ来ていないわね・・・

」

北村が地面へ倒れたまま手を上げた

「稲井は、休むって言ってました」

「そう！なら今日の活動内容を言うわ」

吉良崎はポケットから新聞を出した

日付は今日、二ページ目の小さい記事を見せた

「このごろ、この神社の裏山に謎の失踪事件が起きてるわ

田舎の住民に聞いてみると、悪霊の仕業や神々のたたりと言っている

未だに失踪者は見つかっていないらしい。そこで本当に悪霊や神の
仕業か

調べてみることにしたわ！」

「部チヨー・・・」

「なんだね刻三くん」

「あまりそう言う事件には首をつ込まないほうが・・・」

「そうや、こう事件には絶対犯罪者がやった事件や！」

「うん北村の言ったとおり・・・」

「なによ！それでもあんならオカルト部？」

オカルト部と言うのはミステリアスについて調べる部活よ！

この事件もミステリアス要素がいっぱいだわ！

わたしの独自の調査によると、この神社の裏山は悪霊を縛り付けるため神が作った

と言われているわ、だから悪霊が山に入った人間を餌として食う、
と言いつたのよ！

昔から立ち入り禁止になっているし警察の調査隊も25人行方不明
になっている

まさに悪霊の仕業よ！」

刻三と北村は顔を見合わせた

「部長さんそこまでわかってるならいちいち調べなくて
いいじゃないですか？もし本当に悪霊の仕業なら

キケンです」

「そうですよ、新聞に載るぐらいの事件です
危ないです！」

刻三も北村の意見に賛成した

何よりもそこまで調べてるなら命がけで
調査しなくてもいいのではないか？

「むむむ・・・確かにそうだけど

わたしは本当に悪霊の仕業が確かめたいのよ！」

吉良崎はベンチの下に置いてあった小さいリュックを背負った

「わたしは調べに行くわ！もしわたしが18時に戻ってこなければ
警察に届出なさいよ！」

「部長さんキケンですって！」

吉良崎は北村の言葉に耳を貸さずに、裏山に向かってしまった
そのたくましい後姿はまさに冒険魂

「やれやれ、たくましいね部長さん

どうする？刻三」

「うむ・・・僕、心配だから 北村ちよっとまってて！」

「え？ちよつ 刻三！」

刻三は自転車のかごにあるサイドバックを手に取り
部長の後を追いかけた

つづく

序章 出会いの手前（後書き）

初投稿です

最後まで読んでいただきありがとうございました
まだどういうストーリーかわからないと思います

次回 第一章 パート1急展開を迎えるので

ご期待ください

第一章 パート1 闇、光、遭遇（前書き）

部長を探しに森に入った刻三清一^{きざみせいいち}は
森の違和感にあせりを感じた

第一章 パート1 闇、光、遭遇

「部長！！どこですか？」

見失ってしまった。

あたりは濃い霧で視界が悪くなっていた

「んゝ何も見えない、どうするべきか……」

部長を探しに行くか行かないか

行っただとしてもこのまま迷い続けてしまう

いや、その前にコレは迷っているのだろうか

ふと、後ろを振り返る

やはり霧で来た道がわからなくなっていた

「迷った……」

しかも不気味な森だ

鳥の鳴き声はしない、地面を見ても虫は一匹もない

なによりも肌寒い

「ぶるぶる 真夏でこの肌寒さ……どーなってるんだ？」

しょうがない部長を探すか

！！

刻三は何かの視線を感じた 背中がぞつとし

急に体の体温が下がった

「誰かに見られている……」

……

ゆっくりと後ろを振り向く

誰かが近づいてくる……

ザッ ザッ ザッ

……

「僕、ここで何をしてるのだね？」

そこにいたのはヘルメットをかぶり作業服の腕に作業責任者という作業管理関係腕章をつけた男が

刻三に話しかけてきた

「なんだあ ビビリらせないでせよ！」

「おっと、それはすまない 田舎の子か？」

だったらこの辺に近づかない方がいい」

「悪霊がいるからですか？」

「ハハハ！ まあそんな噂は聞いたことがあるが
違うな！ もしかして信じてるのか？」

「はい、ぼくはこう見てもオカルト部ですから」

「なるほど、調査中ってわけか！」

刻三はふと本来の目的を思い出した

「ああそうだ この辺で女の子を見ましたか？」

ノースリーブのワンピースを着た」

いかんいかん、びくびくしてて部長のこと忘れていた！

「いやあ見てないな・・・」

「そうですか・・・」

「リーダー準備が整いました！」

男と同じ作業服を着た青年が走ってきた

工事をするのか？

「あの・・・」

「ああ僕、この山を平らにする工事をするら森から出たほうがいい」

「しかし部長・・・いや僕さっき言ってた女の子を捜さなきゃ
いけないんです」

「おお・・・そうか」

男は顎あごを持ちながら数秒考え事をした

「・・・よし！ おい若造」

「は・・・はいっ」

「この霧だ作業開始時刻を延長する！ その間この山を全員で調査する」

「了解しました」

「ついでだ、女の子探しを手伝ってやる！」

その言葉に刻三の心が熱くなった

このおじさんなんて親切なんだ！

「はい！ ありがとうございます」

「いいってことよ！ 俺にも五歳になる息子がいてな
ぼくを見てるとほっとけなくな・・・」

よしオレはあっちを探すぜ！ 見つかったら連絡をする」

男と刻三は電話番号教え

西に向かって再び部長を探しに足を進めた

あれら一時間

なかなか見つからない部長に

あせりを感じた刻三

部長に電話しようとしたが圏外

「まずいな・・・」

ますます気温が下がっていくのを感じた

森なのにセミの鳴き声がしないのは

低い温度でまだ冬だと勘違いしてるのか？

いや、それよりわがまま部長

「むう・・・」

ああああああああああ！！

「！！ なんだ？」

声が森に響き渡った

続く

第一章 パート1 闇、光、遭遇（後書き）

最後まで読んでいただいた方 ありがとうございます
いよいよ始まりました！第一章

最後響き渡った声 果たしてその声はいつたい？
次回グロ注意です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6134x/>

フィニクス ～永遠の青～

2011年10月19日22時12分発行